

マタイ9章9節～13節

説教題名「わたしが喜びとするのは真実の愛。いけにえではない」

日本長老教会杉並キリスト教会

2021年8月22日

皆さんは中村哲という医者のお話はご存知でしょうか。1946年に福岡県で生まれました。彼は医師免許を取った後、38歳の時に日本キリスト教海外医療協力会からパキスタンに派遣されました。20年以上にわたってハンセン病の患者を助ける活動をしました。大変な奉仕だったのですが、彼は全ての人に愛されて、親しみのを込めて「ナカムラのおじさん」と呼ばれていました。彼は母国の日本が大好きでしたが、無力で困っている人々を助けるために、自分の全てを犠牲にして、その活動を続けました。彼はクリスチャンだったので、神様の愛を受けて、その愛を表すことに熱心でした。献身的な活動が認められ、彼は多くの人道的援助の賞を受賞しました。

中村先生の素晴らしい生涯の話聞いて、感動すべきだと思います。しかし、発展途上国に行って、全く会ったのことがない人々を支えるなんて、恩返しのできない人を助けるためのやる気はどこからくるのかとも思うかもしれません。しかしこれこそ「真実の愛」です。一つだけはっきり言えることは、中村先生はイエス様の福音を見落とさなかったということです。中村先生は間違えなく、福音の根本的な真実を信じていました。福音、神様の真実の愛は、彼にとっては何よりも尊いものでした。

今朝、マタイの9章の話を通して、神様は私たちにシンプルな質問をしています。その質問は「イエス様の福音は私たちにとって一番尊いものなののでしょうか？」という問いです。私たちは様々な理由で、日々の生活の中で福音の素晴らしさを見落とす誘惑に陥っている傾向があります。そうしてしまうと、自分の家族、自分の生き方、自分の教会に非常に悪い影響を与えます。

「行って学びなさい」マタイの福音章で、イエス様は2回このフレーズを言いました。

「わたしが喜びとするのは真実の愛。いけにえではない」。イエス様にとってこの教訓が重要であることは明らかです。ではこの「真実の愛」とはどのようなものなのでしょうか。そして、私たちはなぜこんなにも「真実の愛」を見落としてしまうのでしょうか。

神様の真実の愛を見落とす理由は主に二つあります。一つ目を説明するために、まずマタイが弟子に召された場面を一緒に見てみましょう。1世紀のカペナウムの人口は約1,500人とかなり大きな町でした。ローマ帝国の道路は近くを通過していたので、町には収税所が設置されていました。その日、収税所にすわっていたのはマタイでした。

9節を見ると、イエス様は、その道を通りながら、「マタイをご覧になって、『わたしについて来なさい』と言われた。すると彼は立ち上がって、イエスに従った。」と書かれています。なぜ、イエス様は町の1,500人の中で、取税人のマタイを召されたのでしょうか。それは予想外のことでした。なぜなら、当時のユダヤ人の中で、取税人は人一倍嫌われていたからです。この時代、ローマ帝国がユダヤ地方を支配していました。ユダヤ人はあまり自由がなかったのが当然、ローマ帝国を軽蔑していました。しかし、この取税人たちはユダヤ人なのに、ローマ人と一緒に協力して、自分の部族のユダヤ人を弾圧している

というイメージをもたれていたのです。それに、ローマ人は異邦人だったので、彼らと商売すると汚れた者という存在でした。そのような状況であっても、イエス様はこの取税人、この裏切り者、汚い商売人のマタイを召されました。マタイはどのように反応したのでしょうか。この頃、イエス様はカペナウム町の誰もが知っている存在になっていました。マタイはおそらくイエス様の教えを聞いたり、イエス様の御業を見たりすることがあったのでしょうか。9節では、非常に簡潔に表現されています「彼は立ち上がって、イエスに従った。」

次の場面で覚えていただきたいのは、マタイ自身がこの場面を書き留めたということです。この場面は彼の家で起こった出来事ですが、彼は聞き手である私たちに衝撃を与える言葉を使って書きました。10節で彼は「見よ！」という言葉を入れています。「イエスが家の中で食事の席に着いておられたとき、見よ、取税人たちや罪人たちが大勢来て、イエスや弟子たちとともに食卓に着いていた。」なぜ衝撃を受けるかということ、これは日常的に起こることではなかったからです。ユダヤ教の先生は公の場で罪人として知られている人々と親密に食事を共にすることはしませんでした。

現代の私たちがこの場面を読んでもあまり衝撃を受けないかもしれませんが、それは今イエス様がここにきて、牧師や、長老さん、信徒たちではなく、地域で評判の悪い人、大酒飲みの人や、クリスチャンではない人達と真っ先に食事をするようなものです。もし、こんなことが実際に起こったら、私たちはショックを受けるでしょう。

しかし、イエス様はなぜ、わざわざそんなマタイを召されたのでしょうか？それは、ご自分の真実の愛の深さを理解してもらうためでした。他の弟子達も社会的な地位は高くなかったかもしれませんが、少なくともマタイのように道徳的、宗教的に疑われる存在ではありませんでした。

カペナウムの中で、このことを全ての人が祝っているわけではなかったのです。古代中東では、誰かの家に入って、一緒に食事するのは非常に、親しい関係のあるという印でした。イエス様のようなユダヤ教の先生にとっては、このようなことはしてはいけないことでした。なので、当時のユダヤ教の指導者のパリサイ人達はこの行動を受け入れることはできませんでした。汚れる恐れがあったので、パリサイ人はマタイの家に入りようとも思いませんでした。おそらく、家の庭からイエス様の弟子達に11節にあるように「なぜ、あなたがたの先生は、取税人や罪人と一緒に食事をするのですか」と尋ねたのでしょうか。

イエス様にもそれが聞こえて、イエス様は二つのことわざを用いて彼の怒りに反応されます。一つ目は「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。」二つ目はホセア書からの引用です。13節にこう書いてあります、「『わたしが喜びとするのは真実の愛。いけにえではない』」

パリサイ人達はイエスの弟子達に話しかける時、「あなた方の先生」とイエス様のことを言いました。しかしイエス様はパリサイ人に「行って学びなさい。」と、まるで彼らの先生であるかのように言いました。「行って学びなさい。」というのはイスラエルの先生だけが使う特別な言い方です。イエス様は自分の権利を主張するためにこのような言い方をしました。「行って学びなさい。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためです。」

神様からすると正しいということには問題はありません。パリサイ人に問題があったのは、本当の正しさはどこから来るかということでした。神の国には、丈夫な人は一人もいません。全ての人には罪があるので、全ての人が病人です。健康な人はいませんが、健康だと思っている人は多くいます。ここでイエス様が「いけにえ」という言葉を使って、表しているのは、律法に従うことです。預言者のホセアの時代のように、当時パリサイ人たちは外面的に正しいことには全て従い健康できよく見えてましたが、心の中を見ると病気で汚れていました。イエス様が言っているのは、「自分の手でやることでは清められない、治らない医者に行くしかない。」ということです。しかしパリサイ人は自分の努力で神様に喜ばれると思っていたのです。これが大きな問題でした。彼らは正しいことをして自己肯定していました。パリサイ人達は正しいものとして見られることを好みました。しかし、内面的には真実の愛を何も知らなかったのです。

ここで大切なのは、医者が必要とするのは私たち、一人一人であるということです。神様から見て、私は病人です。あなたも病人です。マタイのような、罪人で大きなあわれみを受けないと救われません。けれども、イエス様は私たちの全ての必要を完全に満たしてください。使徒パウロは「不敬虔な者たちのためにイエスが死んでくださいました」(ローマ5:6)。と言いました。イエス様は大喜びで罪人を救ってくださいます。マタイは医者のところに行って、癒されました。しかし、自分が病人であることを信じなければ医者に行かないでしょう。自己肯定な考えで、自分が病気であることに気づかないようではいけません。そのような考え方を捨てましょう。

皆様も自己肯定な考えと戦うことはあるでしょうか？心を整えるために、今からするいくつかの質問を自分自身に問うてみてください。何に腹が立つのでしょうか？周りの人が敬意を払わないと怒りますか？他の人の成功を見て腹が立つことはありますか？その一方で、何が皆さんを幸せにしますか？他の人の不幸を喜ぶ時もありますか？それを見て、自分の気分が良くなる時もありますか？同僚が成功するのを見たら不幸になるのですか？これらは、自己肯定の確実な兆候です。

今もよく覚えています。数年前、知り合いの宣教師がアメリカに戻るという情報をインターネットで見ました。それを見て、本能的に自分を誇りに思っていました。私は帰国していません！私は強い、我慢できる宣教師です。これは嫌なことですね。病人である証拠です。その時の私は、パリサイ人のように自己肯定をして、本当の愛を見落としてしまったのです。正しさはどこから来るのかということをお忘れしました。日本での忠実な奉仕が私を正しくするのではなく、イエス様だけが私を正しくするのであり、それ以外のものに頼ってしまうことを悔い改めなければなりません。心に少しでも自己肯定があれば、私たちの霊的な病、そして神様の真実の愛を見落としてしまうケースが多いのです。しかし、真実の愛を見落とす理由は自己肯定だけではなく、他に何かあるのでしょうか。

その質問を解くために、イエス様の行動と、パリサイ人のやらない行動を比較してみたいと思います。イエス様はあらゆる罪人に対してどのような態度をとったのでしょうか。マタイの9章には、イエス様はマタイや他の罪人を喜んで受け入れたことがはっきり分かります。しかし、イエス様にとって、彼らを受け入れることは不利な結果をもたらしました。そのことについて考えてみましょう。当時のユダヤ教の会堂のリーダーたちはイエス

様の行動に怒りました。ユダヤ社会からすると、罪人と関わりと汚れていると言われました。弟子達も、イエス様の行動に対して、文句を言うときもありました（例えば、ルカ19:7）。しかし、イエス様はこれらを全て気にせず、喜んで罪人たちと関わりました。罪人に愛を示すことで、イエス様は、社会から恥を受けることになりました。しかし、イエス様は、罪人と呼ばれる人たちと一緒に過ごすことを楽しめました。このことは罪人の私たちにとって嬉しいことではありませんか？

ここでイエス様は私たちに、聖なる人生を送るとはどういうことなのかを示してくださっているのです。できる限り罪人を避けるという行動は最も聖なる人生の送り方だとよく思われますが、イエス様の生涯をみるとそうではありません。イエス様は神の律法を一回も破ることなく、神様が人間に求めている生き方をまさに体現していたのです。「みことばは人となって、私たちの間に住まわれた」（ヨハネ1:14）。それはこのイエス様のことでした。生涯の全ては天の父を敬いました。聖なる人生の送り方を学びたいなら、イエスのようになればいいのです。律法を成就するために来られた彼は、分離主義的な孤立して関わるのではなく、罪人に手を差し伸べることに関わることを明確にしています。

これまで見てきたことを考えると、もし私たちが主に従うのであれば、イエスのようになりたいのであれば、私たちもこのような愛を罪人に手を差し伸べなければなりません。これは、パリサイ人達が拒んだことでした。良い医者には病人を避けないでしょう。良い医者は病人や困っている人を助けに行くのが大好きです。パリサイ人たちは、罪人を砕き、正しい人を立ち上げる救い主を期待していました。これは彼らがいかに旧約聖書を理解していなかったかを示しています。

ここで、イエスが引用したホセア書の一節の背景について、簡単に説明したいと思います。前言ったように、預言者のホセアの時代には神様の民には大きな罪の問題がありました。それは、紀元前8世紀、イスラエルの北王国にありました。イスラエルの人々は、毎日毎日、いけにえを捧げ、律法を守っていましたが、心の中には偶像礼拝がありました。彼らの偶像崇拜を神様は姦淫と呼び、ご自分の民を売春婦と呼ぶほどひどいものでした。そして、イエスはパリサイ人達に、ホセア書をもう一度読んでくるように言われましたが、どうやら彼らはそれを理解していなかったようです。つまり、私たちが神様から真実の愛を受けられるなら、私たちも最悪の罪人にもその同じ真実の愛を示すべきでしょう。

この箇所にある「真実の愛」という言葉は、聖約（契約）の愛、無条件の愛、決して死なない愛を意味しています。翻訳によっては、「あわれみ」とも訳されています。それは、神様が私たちの痛みや悲しみに、深く同情することです。ホセア書でのこの言葉、そしてここマタイでのこの言葉は、神の民が他の人に示すべき「真実の愛」または「あわれみ」を意味しています。私たち神様の民の責任は、この揺るぎない愛をこの世に映し出すことです。これは、いけにえを捧げるよりも、律法の暗黙の遵守よりも大切なことです。教訓は、律法の遵守とあわれみの利益が相反する場合、あわれみが優先されるべきであるというものです。

イエス様についていくために、イエス様のように真実の愛を他の人に示す必要があります。もちろん、私たちは医者が必要ですが、私たちも苦しんでいる世界に対して医者の役割を果たすべきです。これはパリサイ人が理解できなかった愛であり、彼らが神を知らな

いことを示しています。だからこそ、同じ過ちを犯さないようにするには私たちはどうすればいいのでしょうか。あわれみ、「真実の愛」を示すことは、私たちにとってどのようなことなのでしょう。

何年も前に、ヒューストンのダウンタウンにあるレストランで一人でランチをしていた時のことを思い出します。ホームレスの男性がテーブルからテーブルへと歩き回り、何か食べるものはないかと尋ねていました。彼が私のところに来る直前に、レストランの従業員が彼に立ち去るように言いました。私の心の中にはどんな反応があったかという、恥ずかしながら、ホッとしました。彼にあわれみを示すために、私は何を犠牲にしたらどうか？ 気まずい会話になったかもしれません。臭かったかもしれません。彼と話すために時間をさかなければならなかったかもしれません。このホームレスに親切にしたら、他のお客さんにどう思われるだろうという気持ちを抑えられませんでした。結局、その時、私は自分自身のことしか考えずにいて、自分の快適さや時間を犠牲にしてまで、彼にあわれみを与えませんでした。皆さん、これは主から遠く離れた心です。その時私は、イエス様からどのようにあわれみを受けたかを見落としたことと同じです。

神様が私たちに示した真実の愛を見ると、神様がご自分のすべてを犠牲にしたことがわかります。ですから、神が私たちに呼びかけている愛は、不利益な結果を伴う、自分自身を犠牲にする愛であると確信できます。「真実の愛」の本当の定義は「代償」です。私たちは、自分にとって益であることなら、他の人にも何かしてあげます。イエス様はユダヤ人の指導者たちから恥を受けなくてもよかったのですが、罪人を愛するためにそれを引き受けたのです。イエス様がひどい十字架にかけられなくてもよかったのですが、私たちが罪から救うためにそれを引き受けたのです。

あなたは天の父から受けたこの偉大な愛を踏まえて、神様はあなたに誰を愛するように求めておられますか？ どのように自分を犠牲にして未信者を愛するように神様は呼びかけていますか？ 言い換えると、クリスチャンではない人たちが教会や家庭でより歓迎されるためには、何を変える必要がありますか？ 私たちは、自分とは違う人たちに仕え、愛するために、自分にとって良いことを喜んで犠牲にしていますか。

なぜ私たちはこのような犠牲を払う必要があるのでしょうか？ 福音の核心はあわれみ、「真実の愛」だからです。キリストに従うことは、主のあわれみを受け取るだけでなく、主が造られた世界にそれを示すことです。真実の愛を示すと、毎回、例外なく、自分を犠牲しなければいけません。その自己犠牲を恐れて、真実の愛を見落としてしまうケースが多いと思います。

まとめです。最後にもう一度、中村哲先生の生涯をみていきたいと思います。彼はパキスタンで長年奉仕した後、アフガニスタンに渡り、砂漠を緑豊かな森と生産性の高い小麦の農地に変える運河の建設に携わることになりました。しかし、2019年に、アフガニスタンのテロリストに暗殺され、究極の代償を払うことになりました。

神様は皆様に命を捨てろとは召されないかもしれませんが、外国に行かなくても、「真実の愛」を実践することができると思います。中村先生は私たちに福音の核心を示してくれました。私たちがまだ罪人であったとき、私が罪人であることを知っておられて、あなたが罪人であることを知っておられて、私たちが罪に病んでいたとき、私たちが癒されるためにキリストが私たちのために死なれました。この行動を通して神様は私たちに対するご

自分の愛を明らかにしておられます。私たちの苦しみ、悲しみに、深く同情して、究極のあわれみを示してくださいました。

主は、マタイや使徒パウロや、私やあなたのような最悪の罪人を喜んで救ってくださいました。主が救ってくれない罪はありません。自己肯定的な考えも、人を愛することへの恐れからも主は救ってくれます。罪人である私たちは熱心に、切実に必要としている世界にあわれみを示す時にこの世を変える福音の力がこの世を照らします。そうするためにイエスの言葉を借りれば、皆様が必要とするのは「行って学びなさい」、というイエス様の命令に従うことです。